第53回大会キーノートレクチャー：体育史

トゥルネンとギムナスティーク： トゥルネン史の基底にながれているもの

山本 徳郎

Turnen und Gymnastik

Tokuro Yamamoto

Key words : Leibesübung, Sportgeschichte

(Japan J. Phys. Educ. Hlth. Sport Sci. 49: 41-49, January, 2004)

キーワード：身体教育，運動教育，スポーツ史

I はじめに：トゥルネン史へのかかわり

表題にかかげた「トゥルネンとギムナスティーク」とは、ドイツ体育スポーツ史では有名な、ヤーン（1778—1852）とグーツムーツ（1759—1839）が、それぞれの教育的身体運動を表わす概念として用いた名称である。時代的にはグーツムーツが先であるから「ギムナスティークとトゥルネン」とせねばならないところであるが、筆者の研究テーマが常にトゥルネンであったこと、そしてドイツの体育スポーツを表現する独特の用語がトゥルネンであることから、強いてこの順に並べた。

1955年1月からヤーンの主著の一つである『ドイツ・トゥルネン術』（1816）¹⁾を読みはじめ、それを学部の卒業研究にして以来、筆者はヤーンや「初期トゥルネン」²⁾に関心をもち、その調査研究に時間を費やしてきた。この領域の魅力は、多くの学位論文を含め、先行研究が質量共に豊かなこと³⁾、及び「平行棒論争」に代表されるような「論争」が繰り返し存在していたことである。し

たがって、筆者は現場の体育・スポーツの指導にかかわりながらも、この領域の研究を続けることによって、多くの先人たちの思考に学ぶことができ、幸せであった。現在は、1997年に仮説として公表した『プレスラウ・トゥルネン論争』⁴⁾の研究を継続し、初期トゥルネン史をまとめようとしている。

筆者の研究活動を、研究らしい営みにするきっかけを作ってくれたのは1950年代に学位を取得したシュレーダーの論文『ヤーン像の変遷』⁵⁾だった。それは旧東ドイツ（ドイツ民主共和国）が国として成立したばかりのごく初期の理想に燃えていた時期になされた研究で、『身体文化の理論と実践』誌に4回に分けて連載された（後に藤井政則氏によって翻訳⁶⁾された）。この論文は、ヤーンが活躍した時代から東西ドイツに分裂した当時までの約150年のドイツにおけるヤーン像の変遷を丹念にたどり、時代によって、社会的な枠組みによって、人物評価が如何に変わるものかを具体的に教えてくれた。歴史研究の一つの方法としても示唆に富む論文であった。

研究的活動を始めたばかりの筆者は、シュレーダーの学位論文に刺激され、改めてヤーンとは如

国士舘大学体育学部

〒206-8515 東京都多摩市永山7-3-1

連絡先 山本徳郎

Kokushikan University, Faculty of Physical Education

7-3-1, Nagayama, Tama-shi, Tokyo 206-8515

Corresponding author tyamamo@kokushikan.ac.jp

何なる人物であったのかということに興味を覚えた。彼に変わらない部分があるとすれば何なのかを探りたくなり、東京大学の中央図書館で偶然見つけたヤーンの『ドイツ民族性』(1810)⁷⁾を原典で読み、『ヤーンの根本思想』と題する修士論文⁸⁾をまとめた。なお、この原典には「青島」の印があり、歴史を感じさせるものだった。

1989年9月、東西ドイツの壁が崩壊(同年末)する寸前に、筆者は3週間、ヴォンネベルガー教授の世話になりながらライプツィヒ体育大学に滞在した。その機会にイエナ大学を訪れ、シュレーダー教授にお目にかかることができた。壁崩壊後、旧東ドイツの歴史関係の教授たちがどうなしているか気になっていたが、最近シュレーダー教授は約200ページにわたる『グーツムーツ』(1996)⁹⁾を出版し、ご健在ぶりがうかがえた。この最終章は「グーツムーツ像の変遷」とでも言うべき内容で、彼の若い頃書いた「ヤーン像の変遷」と比較しながら興味深く読むことができた。

II 現代ドイツにおけるグーツムーツ、ヤーンへの関心

最近のドイツにおける体育スポーツ史研究では、出版される著書や雑誌の特集を見る限り、グーツムーツやヤーンへの関心が高まっている。例えば、上記のシュレーダーの『グーツムーツ』もその一つであるが、2000年5月の『スポーツ科学』¹⁰⁾誌や、その数年前に出た『スポーツの社会現代史』¹¹⁾誌がトゥルネンやヤーンを特集している。筆者が『体育史研究』(第18号、2001年)で書評として紹介したアイゼンベルク論文¹²⁾もその中の一つで、マックス・ウェーバーのカリスマ理論を援用した内容のものだった。また2002年7月金沢で行われた国際体育スポーツ史学会(ISHPESセミナー)でも、プистер教授が「記憶の場」論を利用しながらヤーンを論じていた¹³⁾。

今ドイツにおいて、このような近代ドイツ体育スポーツ史の原点とも言える1800年前後の問題に関心が寄せられるようになったきっかけは、

1992年5月に行われたドイツ・スポーツ科学学会スポーツ史部会(日本的に言えば、ドイツ体育学会体育史専門分科会)の年次大会にあったようだ。報告書¹⁴⁾によると、メインテーマは、「汎愛派からブルシェン・トゥルナーへ—ドイツにおける近代的運動文化(Leibesübungen)の始まり」であった。開催された時期が、東西ドイツの統一直後であっただけに、第二次大戦後から壁崩壊(1989年末)までに両者が行ってきた歴史研究の蓄積を総括しておく必要があったようだ。開催地は、グーツムーツが活躍した汎愛学校から数キロしか離れていない所が選ばれ、不便な所であったが約60名が参加していた。会期中に、その汎愛学校に付設されているグーツムーツ記念館や、比較的近くにあるヤーン博物館(ヤーンが晩年を過ごした住居跡)を訪れ、それぞれの地でシンポジウムも行われた。

報告書によると、この大会は四つの部会に分かれて行われた。それぞれのテーマは「汎愛学校での教育とギムナスティーク」、「トゥルネンとブルシェンシャフト」、「後期ヤーン」、「DDRにおける遺産の受け入れ」というものであった。報告書の最後は、東西ドイツのスポーツ史家の対話はまだ一つの結論に到達していないので、今後さらに徹底的な相互交信が必要だということで終わっている。

ちなみに、2002年10月15日はヤーン没後150周年である。これまでグーツムーツやヤーンにかかわる記念の年には必ず行事が組まれてきたことを考えると、今年もドイツでは何らかの催しが計画されていると思う。これに関連して改めて不思議に思うのは、日本ではこの種の催しが、我々の領域には殆どないということである。これは何故だろうか。

III ブレスラウ・トゥルネン論争

先述したように、筆者は1800年前後のドイツの運動文化、特に初期のトゥルネンに注目してきたが、この時期の問題を解く鍵は、その末期に行われたブレスラウ・トゥルネン論争やトゥルネン

禁止をめぐる問題にあると考えている。

周知のように、ドイツ・トゥルネン史には多くの論争が存在していた。最も有名なのが1860年に、スエーデン体操の導入をめぐって争われた「平行棒論争」¹⁵⁾であろう。その他にも、思いつくままに挙げてみると、平行棒論争直後のオイラー対ヴァスマンスドルフ論争、19世紀末のトゥルネン対スポーツ論争、20世紀初めのノイエンドルフ対ガウルホーファーによる「システムか生命か」論争¹⁶⁾、20世紀半ばの東西ドイツのケルパークルトゥア対ライベスユーブンゲン問題、東ドイツの「理論論争」等である。それらの論争・対立の根底の一部には、『ブレスラウ・トゥルネン論争』（1997年）で仮説として設定したトゥルネン派對ギムナスティック派の対立と思える部分が存在していたと考えられる。

そこで、ここでは、すべての論争に先立って行われたブレスラウ・トゥルネン論争に再度注目しておこう。ブレスラウ・トゥルネン論争とは、初期トゥルネン末期の1818、19年にシュレージエン地方の中心都市ブレスラウ（Breslau, 現在ポーランド南西部に位置する都市 Wroclaw の旧称）の知識人が、トゥルネンをめぐり、二つに分かれて行った論争である。初期トゥルネンを検討するうえで、その末期に行われたこの論争は、その直後（1820年1月）にトゥルネン禁止令が出されただけに、極めて重要な出来事であった。

これまでの研究によると、この論争は、一方は青少年に与えるトゥルネンの政治的・宗教的偏向を攻撃する保守的なトゥルネン反対派、他方はドイツの統一をめざす、平等、公開、自主、共同の特質をもつトゥルネンの国民教育的意義を強調するトゥルネン擁護派に分かれておこなわれたとされていた¹⁷⁾。この論争も一つの原因になってその直後にトゥルネン禁止令が出されたことを考えれば、この見方の正当性も認められる。しかしこの見方は、悪である保守反動派と善である進歩派の間の論争という具合に、二つにあまりにも単純に分けられ、全体が政治的イデオロギー論争としてまとめられてしまっているの、そこに潜む体育史的意味は見失われてしまっていると思う。

そこで筆者は、かねてから着目していた19世紀初頭のドイツにおける運動文化概念の変化（Leibesübungen—Gymnastik—Turnen）と、そこでの身体理解（LeibとKörper）の違いから、論争の体育史的意味を探る可能性を考え、その根底には「身体教育」を目論むグーツムーツ派と、「運動教育」を推進させようとするヤーン派の対立が存在していたのではないかという仮説を立てるにいたったのである¹⁸⁾。

IV グーツムーツとヤーンの関係

まず対立の原点とも言うべきグーツムーツとヤーンの関係について確認しておきたい。

彼等は、1800年前後にドイツにおいて運動文化の近代化が進められたとき、それを代表する人物であった。これまでもドイツではこの両者にかかわって、近代的運動文化成立に関する研究が数多くなされた。両者には運動文化を示す言葉にギムナスティック（グーツムーツ）とトゥルネン（ヤーン）という大きな違いがあったにもかかわらず、これまでの研究に示された基本的な考えは、19世紀初頭に活動を始めたヤーンは、すでに18世紀末に活躍していたグーツムーツを「発展的に継承」したというものだった。最近のシュレーダーの著作でも、「両者（グーツムーツとヤーン）がドイツのトゥルネンとスポーツの礎石を置いた」¹⁹⁾と述べられ、両者の同一性を強調しているように思える。

二人の間には約20年の年齢差があったが、両者は次ぎのような具体的な関係を持っていた。

1. 1807年、ヤーンはグーツムーツのいるシュネッペンタールを訪問した。

ヤーンは大学の教員を目指して論文²⁰⁾を仕上げたが、その直後にプロイセンはナポレオンに敗れ、ノイエンドルフによって「百マイル迷走の時代」と呼ばれた時期をすごしていたときに、シュネッペンタールのザルツマン汎愛学校を訪れた。恐らくそこで彼は50歳近いグーツムーツが参加していたギムナスティックの授業を見学したと思われる。

2. 1810年、ヤーンは『ドイツ民族性』の「身体訓練」の項目の中で、グーツムーツに言及した。「純粋な祖国の友グーツムーツが、我々に優れたテキストを提供してくれた」と。そして『青少年の体育』第2版、1804年を挙げている²¹⁾。

3. 1816年、ヤーンはアイゼレンとの共著である『ドイツ・トゥルネン術』の序論で、グーツムーツに言及した。

「冬（訳者注、1811年から1812年にかけての冬）にはトゥルネンについて書かれているものが読み直された。我々は先駆者フィートとグーツムーツに感謝せねばならない。トゥルネンにとりつかれた年長の者達はそれにもとづいて熱心に練習し、次ぎの夏にはフォア・トゥルナー（訳者注、トゥルネンの指導資格を与えられたリーダーのこと）になった。」²²⁾

なお、本書の第5章I「トゥルネンの書誌学」には、グーツムーツの『青少年の体育』初版（1793）、2版（1804）、『水泳書』（1798）、『遊戯書』3版（1802）の四著作が紹介されている。

また、多くの研究者は、本書はグーツムーツ『青少年の体育』第2版に多くを負っていると述べている。（例えばSchröder, 1996, p.2）

4. 1817年、グーツムーツは、彼の『祖国の子弟のためのトゥルネン書』において、ヤーンに言及した。

「青少年の身体訓練は、私の国民教育の一部であったが、かなえられなかった。しかし当時不可能になったものが、後に力強いヤーンによって成功した。彼は再び目覚めさせられたギムナスティークをベルリンへもたらした。」²³⁾

この部分を引用しながら、シュレーダーは次のように言う。「両者（グーツムーツとヤーン）がドイツのトゥルネンとスポーツの礎石を置いた」¹⁹⁾と。つまり、シュレーダーは両者の違いを意識していない。むしろ同一性、連続性を強調していた。

5. 1818年のグーツムーツは『トゥルネン術問答書』²⁴⁾の中で、1817年の書に引き続き、自分の著書に「トゥルネン」の名称を用い、ギムナスティークとトゥルネンの同一性を示そうとしてい

た。

グーツムーツとヤーンの間をこのように見ると、ヤーンは「トゥルネンについて書かれているものが読み直された」と言ってグーツムーツを挙げているし、グーツムーツも「（ヤーンは）再び目覚めさせられたギムナスティークをベルリンへもたらした」と言い、ギムナスティークをトゥルネンと同じものとみなしている。従って、当人同志はお互いの違いを意識していなかったようである。

V ヤーンはグーツムーツの発展的継承者か？—両者の違い—

先に示したように、これまでの研究に示された基本的な考えは、両者には運動文化を示す言葉にギムナスティークとトゥルネンという、大変大きな違いがあったにもかかわらず、19世紀初頭に活動を始めたヤーンは、すでに18世紀末に活躍していたグーツムーツを「発展的に継承」したというものだった。

このように、ドイツにおいても、現在にいたるまで、両者は極めて近い間柄と捉えられており、両者の間にある違いに特に注目されることは稀だった。しかし、筆者は研究を進めているうちに、グーツムーツとヤーンの間には存在する違いに気づき、それに関心をいだき始めた。そして最初は彼らの扱う運動内容の違いに注目し、両者の間には発展的継承の関係だけではなく、その他に受け継がれなかったもの、欠落させていたものもあったことを明らかにした²⁵⁾。すなわち、古代ギリシャ時代のヒポクラテス以来、医師達の身体運動論には常に存在していた発声運動、感覚訓練等が、グーツムーツにまでは継承されていたが（岸野はこれを「ヒポクラテス的発想法の歴史的展開」²⁶⁾と言った）ヤーンには継承されなかったという事実を明らかにしたのである。このことは、グーツムーツとヤーンの間には、つまりギムナスティークとトゥルネンの間に、内容的に明確な違いが存在することを意味したのである。

更に、この二人の主著を読み直してみて、表1

表1 グーツムーツとヤーンが、それぞれの主著^{*)**)}で用いた「身体」の表現と、その使用頻度

	運動文化名	ライプ	ケルパー	備 考
グーツムーツ	ギムナスティーク	79	430	ケ. はラ. の5倍以上
ヤーン/他	トゥルネン	84	36	ケ. はラ. の0.5倍以下

^{*)} GutsMuths (1793) *Gymnastik für die Jugend*. (Sport Verlag, 1957)

^{**)} Jahn, F.L. u. Eiselen, E. (1816) *Die deutsche Turnkunst*. (Sportverlag, 1960)

に示すように、両者の間には、運動文化を担う「身体」を示す言葉にも違いがあることに気づいた。グーツムーツは主としてケルパー (Körper) を使っているが、ヤーンはライプ (Leib) を用いていたのである。特にヤーンの場合は、彼自身が書いたとされている部分 (序論, 第4章) ではライプしか用いず、ケルパーは全く使っていなかったのである。このことは、それぞれの運動文化を示す言葉に違いがあったこととも関連があった。

このように、ヤーンはグーツムーツの単なる発展的継承者ではなく、グーツムーツのものとはかなり異なる、むしろ異質のものを提示していたのである。

VI ギムナスティークとトゥルネン —術語史的検討—

グーツムーツの用いたギムナスティークは、これまで一般に古代ギリシャ以来の言葉と考えられ、グーツムーツへ到るまでの連続性が疑われていなかった。確かにラテン語を用いた世界 (領域, 階層) ではそのように考えて良かったかもしれないが、シュトロマイヤーの作成した表²⁷⁾を見ると、注目しておかねばならない意外な事実の存在に気づく。

ドイツ語圏ではライベスユーブンゲン (Leibesübungen) が古くから存在していたが、グーツムーツが用いたギムナスティーク (Gymnastik) は、ドイツ語としては1751年に初めて登場してきたということ、そしてケルパー (Körper) が運動文化の名辞との関係で用いられ始めるのも18世紀半ば過ぎだったということである。このことはツァイドラー論文²⁸⁾の検討に

表2 運動文化にかかわるそれぞれの名辞が初出した年

ドイツ	オーストリア	運動文化を示す名辞
15世紀	16世紀初め	Übung
1519	1553	Übung des Leibes
1521	1561	Leibes Übungen
1561	1610	Leibesübung
?	1682	Übungen des Leibes
<u>1751</u>	1786	<u>Gymnastik</u>
1752	?	Bildung des Leibes
1765	1610	Leibesübungen
<u>1765</u>	1786	Übung des <u>Körpers</u>
1765	1794	gymnastische Übungen
1771	?	Eerziehung des Körpers
1773	1794	körperliche Erziehung
1776	1781	Bildung des Körpers
1779	1767	körperliche Übungen
1787	?	Körper bungen
1789	?	Körpererziehung
1793	?	Leibes-Erziehung
1794	?	Körperkultur
1811	1816	Turnen
1817	1819	Leibeserziehung
1828	1841	Sport

(下線は筆者)

よって更に裏付けられた。この論文は1819年までのドイツにおける運動文化の術語を調べたもので、その第3部は、彼が資料として利用した16世紀以後の87文献の運動用語を整理した術語辞典になっている。各用語はその出典が明記されているので、それぞれが使用されている文献の出版年を表3のように整理してみると、シュトロマイヤーの調べたこととほぼ一致していることが明らかである。

ラテン語のギムナスティカ (Gymnastica) がドイツ語 (Gymnastik) 化した18世紀半ばは、

表3 Leib, Körper, Gymnastik を用いている文献の出版年の古い順

Leib	Körper	Gymnastik
1523	1765	1750 *
1659	1769	1765
1711	1774	1768
1712	1779	1774
1742	1783	1779
.	.	.
.	.	.

* Gymnastica の形で

丁度汎愛派の人々（グーツムーツもその一人）の活躍が始まった頃だった。ドイツの体育史では、ヤーンがトゥルネンという新しい言葉を造語したことは繰り返し述べられてきたが、グーツムーツとても当時のドイツ語にとっては極めて新鮮な感じをもつ新しい言葉のギムナスティークを採用したということについては、全く知られていなかった。だとするとグーツムーツは何故、ドイツで古くから伝統的に用いられていたライベスユーブンゲンではなく、外来語のギムナスティークを用いることにしたのか。またヤーンは何故、当時すでにかなり多用されるようになっていたギムナスティークではなく、ドイツ語に語源を求めてトゥルネンを造語したのか。このことが改めて疑問に思えてくるのである。

VII 若干の考察

以上のようなターミノロジー的動向から、1800年前後のドイツにおける運動文化の近代化過程をおおよそ次の様にとらえることが出来よう。即ちドイツでは運動文化を示すのに古くからライベスユーブンゲンが用いられていたが、18世紀後半になると、それまではラテン語の世界でしか使用されなかったギムナスティークが初めてドイツ語化し、汎愛派の人々に利用された。そして身体を示す語もケルパーが好んで使われるようになった。19世紀になると新たにドイツ的運動文化を示す語としてトゥルネンが登場する。そこでは身体を表す語としてはヤーンを中心にライブが好ま

れていた。この動向を単純化すると

ライベスユーブンゲン（ライブ）

→ギムナスティーク（ケルパー）

→トゥルネン（ライブ）

となろう。しかしこの動向は単に左から右へと単線的に変化したのではなく、常に前のものを残しながらそこに新しいものが加わるという形で進行していた。この様にして1800年前後のドイツにおける運動文化は、新たに複雑な様相を呈するようになるが、新たに出現したもの（ギムナスティークとトゥルネン）にはそれぞれ異なった意図が存在していた。

特にギムナスティークの出現は、ドイツの運動文化近代化過程にとって衝撃的だった。それが外来語であったことと、そこでの身体にケルパーが用いられていたからである。これらの用語を用いようとした意図はいかなるものであったのだろうか。ケルパーは外来語であったが、すでに13世紀以来ドイツ語の中で用いられていた借用語であった²⁹⁾。

いずれにせよこれらの外来語が18世紀半ばに盛んに使われ始めたということには、当時のドイツ知識人の多くがフランス語（フランス文化）に強く影響されていた時代背景が感じられる。

この時期は啓蒙絶対主義の君主として有名なフリードリヒ大王の時代で、ドイツの宮廷や上流社会では、フランス語が日常的に用いられていたというのである³⁰⁾。人々はそれに文明化、科学化（近代化）の雰囲気を感じていたのだろう。古いドイツ語に由来するライブの方はレーベン（Leben, 生命, 生活。英語のlife）と関係する言葉であるが、ケルパーはフランス語のコール（corps）と同様その語源はラテン語のcorpusで、生命のない物体をも意味していたのである。従ってこの語の方が人間の身体をより物的に捉え易くなり、それだけ近代科学の機械的観察の対象となりやすい言葉だったのかもしれない。そこではデカルト以来の二元論的思考方を受け入れ、身体を医学的（科学的、機械的）に考えようとする意図が感じられる。

つまりグーツムーツを始めとする汎愛派の人々

は、身体運動を教育の現場に取り入れたということで、確かに身体運動を医学の領域から教育の問題へ移し変えた人々と評価されてもいいが³¹⁾、その際に人間身体は科学的観察の物的対象にもなっていたことに注意しておかねばならない。当時師範達によって指導されて乗馬、フェンシング、ダンス等の伝統的なライベスユーブンゲンが行われていたが、汎愛派の人々はこれらの運動の科学的な対象化を、まず言葉によって実現しようとしたのである。このように彼等が用いたギムナスティークには身体運動の科学化、合理化への意図が含まれていたと考えられよう。これは現代のスポーツ科学の立場からすると、その確立に大きな貢献をしたきっかけであったと言えるかもしれないが、この動向は恐らく医学等の科学化と歩調を合わせているにすぎず、身体教育学独自の問題とは考えにくい。

なお、筆者はかつて『グーツムーツの感覚訓練』³²⁾の問題を論じた。そこではグーツムーツの近代的限界として、彼の感覚訓練に、人間の感覚を機械的な「測定的事実」に合わせよう（正そう、仕向けよう）とする傾向が見られることを指摘したが、このことも科学化、合理化に向かう時代的趨勢の中での当然の帰結だったのかもしれない。筆者がそれを論じていたのとはほぼ同じ頃、ベルリン自由大学のケーニヒは汎愛派の体育を「人間身体の動く機械としての完全化と、その能力の最大化を目的とした、規格化された科学的生産的労働」³³⁾だと論じていた。また彼は別の論文³⁴⁾で、デカルトを身体機械論者、ラ・メトリを人間機械論者と示しているのは当然としても、更に汎愛派の体育論も身体を機械の如く扱っていると主張しているのである。もっともこの頃は、産業革命期の工場主ではあるが年少労働者の保護に尽力したヒューマニストとしても知られるイギリスのロバート・オーエンでさえも、労働者を「生きている機械」³⁵⁾と表現していた時代でもあった。

ともあれケーニヒは、ホルクハイマーとアドルノがナチズムを批判しながら言う次の様な考え方の源を、フーコー等にも学びながら近代体育成立期、つまりグーツムーツの時期に見ようとしてい

たのである。即ち、「彼らは身体を、動く機械、組み立てられた部品とみなし、肉体を、骸骨を包むクッションとみなす。彼らは身体やその部分を、すでに自分から切り離されているかのように取り扱う。…身体の操作者たち…はそれと気づくことなく、棺桶作りの目つきで他人を測っている（死者は棺桶に合わせて測られる）。測定の結果を発表して人間を高いとか低いとか、肥っているとか重いとか呼ぶとき、彼らの正体が現れる。」³⁶⁾これは近代的身體観に対してかなり厳しい批判的表現である。

このようにギムナスティークをラテンやフランスの文明（地中海文明）への接近という脈絡の中で考えると、トゥルネン出現の意味はより理解しやすいように思われる。グーツムーツの活躍した18世紀末と違って、ナポレオン支配下に置かれたヤーンは、ナポレオンから祖国を解放しようと考え、ドイツ人に民族意識を目覚めさせるために、ドイツ語の普及と浄化に努力した。民族意識の覚醒とドイツ語の浄化に対する身体運動の意義を感じた彼は、運動文化の用語のドイツ語化にも熱心に取り組んだ。ラテン語、フランス語の影の強いギムナスティーク、ケルパーを嫌ったヤーンは、ドイツ語に語源を求めてトゥルネン、ライブを用いた。これはラテン文明（グーツムーツ、ギムナスティーク、ケルパー）に対するゲルマン文化の如きものとも考えられようが、特にヤーンは人間を分析的にとらえることはせず、人間を一つの生命体として、つまり命のあるライブとして考え、伝統的なライベスユーブンゲンへの密かな憧れを抱きつつトゥルネンという新しい用語のもとでギムナスティークに対抗したのである。

この様にドイツにおける運動文化の近代化の過程は、伝統的なライベスユーブンゲンに対してまずグーツムーツが新しいギムナスティークで科学化、合理化を試み、そしてヤーンはライベスユーブンゲンの復興（ギムナスティークへの抵抗）を試みてトゥルネンを実践し、運動文化の再人間化を志向したととらえられよう。

周知のように、ギムナスティークはギリシャ語

のギムナスティケー (γυμναστική) を語源とするが、ギリシャでもこれはプラトンが活躍しはじめの紀元前 400 年頃に使用され始めた新語であった。プラトンは、当時ギリシャ語になったばかりのこの新語を意図的に用いたようである³⁷⁾。プラトン時代のギリシャは、ニーチェの主張にも見られるように大きな変革期であった。プラトンは外国イタリアのピュタゴラス教団の哲学に学びながら、ギリシャ伝来の考え方の改変を試み、「イデア」の世界を構築しようとした。ハイデガーによると、そのことに気づいたアリストテレスは、プラトンの異国風な考え方のゆきすぎを巻き戻して、ギリシャの動的な考え方の伝統に立ち戻ろうとしていたと言う³⁸⁾。少々無理を承知で言うならば、新しいギムナスティークという言葉を用いて変革を試みたグーツムーツはプラトンと、そしてそのゆきすぎを感じて伝統へ立ち戻る実践をしたヤーンはアリストテレスとに面白い共通性が感じられる。

VIII おわりに

このレクチャーは「ライベスユーブンゲン」、「ギムナスティーク」、「トゥルネン」を、それぞれを時間的対立関係の中に置いて考えた所に特徴がある。このようにとらえることによってグーツムーツが志向していたものとヤーンのそれとの違いがより鮮明になる。両者の運動文化への期待の違いを端的に言うならば、前者は人間身体の機械的完全さを求めているのに対して、後者は身体に担われた人間の変革が目指されていた。即ち運動文化を身体との関係で考えるのか、或いは人間との関係で考えるかということである。これを木下の研究³⁹⁾にしたがって日本語の体育概念で示すと、「身体教育」と「運動教育」といえるかもしれない。したがって汎愛派の体育理論はその一方だけのもので、他方に関しては、ヤーンの登場を待たねばならなかったようだ。従来、ドイツにおける運動文化の近代化過程は、概ね発展的、連続的にとらえられていただけに、この様な整理は、特に論争の絶えなかった以後のドイツの運動文化

史を、二つの立場の弁証法的展開と考えることを可能にし、効果的ではないかと思われる。

注

- 1) Jahn, F.L. u. Eiselen, E., Die deutsche Turnkunst. 1816 (Dresden 版 o.J.)
- 2) 原語は“Ur-Turnen”で、1810年代のトゥルネンのこと
- 3) Pahncke, W. (Hrsg.), Geschichte der Körperkultur. Eine Auswahlbibliographie deutschsprachiger Veröffentlichungen. Leipzig 1967, 45-79. 少々古い資料だが、ここに570論文が示されている。
- 4) 山本徳郎 (1997) プレスラウ・トゥルネン論争, 奈良女子大学文学部研究年報41号, 15-26
- 5) Schröder, W., Das Jahnbild in der deutschen Turnbewegung. In: Theorie und Praxis der Körperkultur. 1959. H. 5 (396-406), H. 7 (576-608), H. 9 (772-787), 1960. H. 5 (394-408).
- 6) 藤井政則訳, 『阪南論集』(阪南大学), 1978-83年に4回に分けて連載
- 7) Jahn, F.L., Deutsches Volkstum. 1810 (レクラム版)
- 8) 山本徳郎 (1961) ヤーンの根本思想. 東京大学大学院人文科学研究科修士論文.
- 9) Schröder, W., Johann Christoph Friedrich GutsMuths. Leben und Wirken des Schnepfenthaler Pädagogen. Sankt Augustin 1996.
- 10) “Sportwissenschaft”. 30. Jg. H. 2, 2000. 特集「トゥルネン」
- 11) “Sozial-und Zeitgeschichte des Sports”. 13. Jg. H. 2. 1999. 特集「ヤーン」
- 12) 山本徳郎 (2001) Christiane Eisenberg; Friedrich Ludwig Jahn — der “Erfinder” des Turnens (Sportwissenschaft, 30. Jg. H. 2. 2000年5月. 125-140頁所収), 体育史研究, 18: 51-53.
- 13) Pfister, G., Places of Remembrance and Collective Identities: the Example of Friedrich Ludwig Jahn. ISHPESセミナー金沢2002 (7月発表原稿)
- 14) Spitzer, G. (Hrsg.), Die Entwicklung der Leibes_bungen in Deutschland. Von den Philanthropisten bis zu den Burschenschaftsturnern. Sankt Augustin 1993.
- 15) 山本徳郎 (1976) 『平行棒論争』に関する一考

- 察—ドイツ体育の科学化は何を意味したか—。文化女子大学紀要7集, pp. 1-10.
- 16) 山本徳郎 (1978) ドイツ体育のナチズム化に関する一考察—ワイマール時代の体育思想史的検討—。文化女子大学紀要9集, pp. 1-10.
- 17) 成田十次郎 (1977) 近代ドイツ・スポーツ史I 学校・社会体育の成立過程, 不昧堂: 東京, pp. 418-422.
- 18) 山本徳郎 (1994) ドイツにおける運動文化近代化過程に関する試論。奈良女子大学大学院人間文化研究科年報9号, pp. 1-10.
- 19) Schröder, W.: aa.O., 1996. s. 2.
- 20) Jahn, F.L., Bereicherung des Hochdeutschen Sprachschatzes. 1806. (Euler 版)
- 21) Jahn, F.L., 1810, 前掲書, pp. 153-154.
- 22) Jahn, F.L. u. Eiselen, E., 1816 (Berlin 1960) XLVIII.
- 23) GutsMuths, Turnbuch für die Söhne des Vaterlandes. 1817. (Sändig Reprint Verlag, 1973), 11.
- 24) GutsMuths, Katechismus der Turnkunst. 1818. (Sändig Reprint Verlag, 1973).
- 25) 山本徳郎 (1971) GutsMuths と Jahn における運動内容の違いが意味するもの—19世紀初頭ドイツ体育の一考察—。体育学研究, 17 (1): 1-6.
- 26) 岸野雄三 (1971) ヒポクラテースの養生法。杏林書院: 東京, pp. 119-120.
- 27) Strohmeyer, H., Zur Wort-und Bedeutungsgeschichte von "Leibesübungen" und "Leibeserziehung" in Österreich vom 16. bis 19. Jahrhundert. in: Wiener Beiträge zur Sportwissenschaft. Bd. 6. Wien 1980. pp. 140-141.
- 28) Zeidler, J. Die deutsche Turnsprache bis 1819. Leipzig 1942.
- 29) Strohmeyer, H., aa.O. S.84.
- 30) ポーレンツ: 岩崎他訳 (1974) ドイツ語史。白水社: 東京, 118頁以下参照。
- 31) 成田十次郎 (1977) 前掲書, p. 57.
- 32) 山本徳郎 (1989) ゲーツムーツの感覚訓練—18世紀末ドイツ体育への一考察—。奈良女子大学大学院人間文化研究科年報4号, pp. 1-11.
- 33) König, E., Körperbewegung bei Platon und den Philanthropen. In: Gebauer, G. (Hg.), Körper-und Einbildungskraft. Inszenierungen des Helden im Sport. Berlin 1988. pp. 181-190.
- 34) König, E., Körper-Wissen-Macht. Studien zur historischen Anthropologie. Berlin 1989.
- 35) Owen, R., The life of Robert Owen. Reprints of economic classics. New York, 1967. p. 250.
- 36) ホルクハイマーとアドルノ: 徳永訳 (1990) 「肉体への関心」『啓蒙の弁証法—哲学的断想』。岩波書店: 東京, p. 374.
- 37) 岸野雄三は「ヒューマニズム体育の理想と現実—プラトン」, 岸野雄三ほか編著『体育スポーツ人物思想史』不昧堂, 1979, 36頁で次ぎのように述べている。「ギムナスティケーや, その専門家を意味する *gymnastēs* という術語は, 少なくとも前400年頃に使用された新語なのである。プラトンは, この新語をしばしば用いているが, しかし彼に影響を与えた同時代人のヒポクラテースは, 余りそれを用いていない。」を参照。
- Mehl, E., Zur Geschichte des Begriff Gymnastik. 1930. In: Von der Steinzeit zur Gegenwart. Wien 1960. 22.も参照。
- 38) 木田元は『ハイデガーの思想』岩波新書, 1993, 160頁で, 「アリストテレスも, プラトンの哲学が多くの点でイタリアの徒 (ピュタゴラス教団) の哲学に従っていたと見ており, そのピュタゴラスの徒たちが, あのピュシスを論じる人たちよりもはるかに異国風な原理や構成要素を採用していると考えている。プラトンがギリシャ伝来のピュシス的存在概念とは異質な存在概念を基底に据えて新たな存在論を構築しようと企てていることに, アリストテレスも気づいていたようである」と述べている。また他のところで, 「ハイデガーに言わせれば, アリストテレスはプラトンよりもいっそうギリシャ的に思索しているのである。…プラトンとアリストテレスの関係についてのハイデガーの見方はかなり特異なものである。…ハイデガーは, アリストテレスが師のプラトンの「異国風な」考え方のゆきすぎを巻きもどして, ギリシャ伝来の自然的思索の伝統に立ちもどろうとしていた,あるいは少なくとも, プラトンの教説を伝統的なものの考え方と和解させ調停しようとしていたと見るのである」と論じている。
- 39) 木下秀明 (1971) 日本体育史研究序説—明治期における「体育」の概念形成に関する史的研究—。不昧堂: 東京。

(平成15年5月1日受付)
(平成15年6月28日受理)